

## その 49

### 80 年前の「堅香子の絵葉書」



この「万葉集ナウ」で、前回（その 48）の最後に次のように書いた。

＜以前、作家阿川弘之氏の親友で名著『万葉幻視考』を残した大浜<sup>いっぴこ</sup>巖比古氏とその 2 人の恩師でヒロシマで被爆死した万葉学者の中島光風氏のことについて紹介した。その際阿川氏の 3 男淳之氏から、たまたまご両親の家の整理をしていたら、両親の手紙類が出てきたのでいずれ送る、という連絡をいただいたことがあった。そこで大浜氏の愛弟子でもあった高岡万葉歴史館の坂本信幸館長に連絡したところ、「資料的価値が高いので、是非当館で保存させてほしい」ということで、整理がついたら同館に寄託することになっていた。いずれ当サイトでもその資料の一部を紹介させていただきたく、本サイトは次回で「終わり」の予定だったが、いったん「中締め」とし、改めて後日その資料に関して報告できることを楽しみにしている次第である＞

そして早速、その阿川淳之氏から 1 通のメールが入った。それは、「本日高岡の万葉歴史館坂本館長宛に大浜さんと中島光風先生の書簡や著作などを送付いたしましたのでお知らせいたします。実家を片付けていたら色々出て来ましたので、結構な量になりました」というものだった。

そして、万葉関係以外で阿川氏が所蔵していた書籍や資料、取材ノートなどは、その内容によって、広島市立中央図書館、或いは、呉の大和ミュージアムのいずれかに寄贈したという。私にとってのもう 1 つのテーマともいえるヒロシマ関係、つまり原爆に関する資料は阿川氏のアーカイブの中ではそれほど多くはなかったが、広島市立中央図書館の方に寄贈された、ということだったので、以前から親しくしているヒロシマ関係の研究者に連絡した。

ほどなくして、大浜氏や中島光風先生など万葉集関係の資料を受け入れた高岡万葉歴史館の坂本信幸館長から一報が入った。贈られた資料の中に思いがけないものが入っていたというのである。

＜阿川氏からお贈りいただいた原稿や手紙の中に、あの「かたかご」の葉書が入っていました。「日めくり万葉集」の番組を見て、なんとなくカラーの絵葉書を想像していたのですが、写真でした＞

その 27（阿川弘之）で紹介した「堅香子の絵葉書」である。私もまったく同じように、美しい色使いのカタクリの花の絵に、あの堅香子の歌が添えられていたのだろうと想像していた。絵葉書とのことだったので、もとより写真とは思っていなかった。それが、昭和も太平洋戦争中、まだカラーの写真などあるわけではないので、モノクロの写真、それも、なんと素っ気ない写真だったのである。その写真をご覧いただきたい。



一見して正直拍子抜けした。前頁の写真のようなカタクリを想像していた目には、もちろん色なしで、花弁もしな垂れている……しかし、阿川氏の目には、このカタクリの写真はまったく違って見えていたにちがいなかった。

おもて表面に書かれた文面を見る前に、阿川弘之氏がこの絵葉書を受け取った時の状況を振りかえってみよう。

これまで、何回かにわたって、万葉集の中の「海行かば」や「醜の御楯」など忠君愛国の歌が、戦時中学徒出陣や玉砕の軍歌として、或いは軍国教育の道具として使われたという事実を書いてきた。戦争が、万葉集を負の遺産としてしまったことはなんともつらいことだった。今もなお、悲惨な戦争を思い出させるとして、万葉集を手にしたくないという人がいることも確かだ。しかし、それらの歌を含めて万葉秀歌を愛する人が多いことは論を待たない。むしろ、同じ戦争の時代、「万葉集は心の支えだった」、「万葉集のおかげで心が慰められた」という声を、何人かの「日めくり万葉集」の選者の方々から聞くことができた。その1人が、阿川氏だった。万葉集に初めて出会い、それを戦場に持って行った時の思い出を、昨日のこのように話してくれた。

「万葉集は、旧広島高等学校1年の時、第1巻から講義を受けました。先生は中島光風というアララギ派の歌人で、先生の講義は、驚くほどフレッシュな感じがして、中学を出たばかりの僕たちの心にしみました。中島先生のお宅に伺っては仲間たちと嘴の黄色い万葉論を戦わせたものです。その時のテキストがこれです」と言って、擦り切れてボロボロになった2冊の文庫本を手にとって見せてくれた。

それから、阿川氏は、この万葉集4516首の中で、最も好きな歌が1首あると言って、そらんじてくれたのが、この「堅香子の歌」だった。

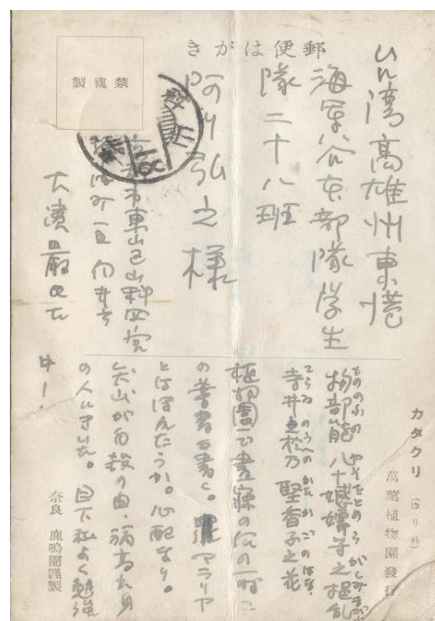
「もののふの 八十娘子らが 涙みまがふ 寺井の上の 堅香子の花」 大伴家持（巻19・4143）

「堅香子の花」とは、カタクリの花のことで、万葉集の中でただ1首、カタクリを詠んだ歌である。

「万葉集の中ではこの歌が一番好きです。というのは、昭和17年に大学を繰り上げ卒業して海軍に入り

台湾で厳しい訓練を受けている時、広島高等学校時代の中島先生門下の仲間で、同期の親友の大浜巖比古が、どこで見つけたのか、カタクリの花の絵葉書に、『こんなものが君の慰めになれば幸い』と添え書きして送ってくれた思い出の歌だからです。その彼も 2 年遅れて海軍に入ってくるのですが、この歌が、厳しい訓練の間の慰めになりました。『もののふの 八十娘らが 汲みまがふ』というのは、大勢の若く美しく艶々した娘たちが、入れ違いに水を汲みながら、いろいろなお喋りをしているんでしょうね。そんな光景がありありと浮かんでくるところが好きです。この親友の大浜は、戦後万葉学者になりました。外地で厳しい訓練に明け暮れる若者にとっては、乙女たちと堅香子を重ね合わせ、清らかなエロチスムを感じさせる歌だったのだろう。まさに阿川氏にとっては忘れがたい青春の歌であり、万葉集中最も好きな歌であるというもうなずける。

さて、そこで、この大浜氏の堅香子の歌が書かれた絵葉書の文面である。それが次の写真だ。



宛先は、日本統治時代の台湾の高雄州東港海軍谷本部隊学生隊 28 班の阿川弘之様宛。消印の山科区は分かるが、切手がはがれていたため日付は不明である。阿川氏が語る「昭和 17 年」であれば、1942 年、つまり、今からちょうど 80 年前の絵葉書である。広島高等学校では同期だった大浜氏は留年により 2 年遅れたため、まだ京都大学の学生だった。従って、差出人の住所は、「京都市東山区山科四宮」、町名は不明で「15」番地の「向井方 大濱巖比古」となっている。

「大浜はいつも万葉歌を白文で読む」と、阿川氏が言っていたように、絵葉書の文面は、いきなり、万葉仮名の原文で始まる。「<sup>ものふの やそをとめらが くみまがふ たらぬのうへの かたかごの はな</sup>物部能 八十城婦等之 搦乱 寺井之於乃 堅香子之花」。

そして、「植物園で晝寝の侘（？）の一時の葉書を書く」とある。絵葉書のクレジットに、<カタクリ（ゆり科）萬葉植物園発行 奈良 鹿鳴園謹製>とあり、「植物園」とは、この葉書を購入した「萬葉植物園」で、昭和 7 年、萬葉集にゆかりの深い春日野の地に開園した、約 300 種の萬葉植物を植栽する日本で最も古い「萬葉植物園」、別名、春日大社神苑のことだろう。京都から奈良の植物園に向いて万葉集のことを考えていたのだろうか、その一時に書いたという。次いで、「マリアとはほんとうか。心配なり」と、まずは

親友の身体のことを案じている。そして、「矢山が自殺の由、福高出身の人にきいた」と、辛い友の報を一言伝えて、最後に、「目下私よく勉強中！」と、！マークをつけ、萬葉植物園まで来て万葉の勉強をしていると書いている。外地の親友に送る、簡にして要を得た便りである。それだけに、この素っ気ない堅香子の写真の絵葉書に、万葉仮名 1 字 1 字にルビをふって書かれた堅香子の歌が、阿川氏の心を揺さぶり、万葉集中 4516 首の歌の中で最も好きな歌と言わしめたのだろう。

さて、戦後万葉学者になった大浜氏は早くに世を去る。そんな親友からもらった堅香子の絵葉書を思い出して、阿川氏は、改めて友をしのぶ。

「彼から絵葉書もらった時は、うれしかったですね。56 歳の若さで亡くなりましたが、僕と違って何しろ、万葉集には詳しく。学問的な視点よりも、むしろ歌人、詩人としての視点からの興味深い論考が、『万葉幻視考』という 1 冊の著書にまとまっています。大浜の残した唯一の本です」。

この唯一の著書は、死後有志の手により、生前の原稿をまとめて出版されたものだが、その中心となったのが、高岡万葉歴史館の坂本館長だった。坂本館長は、「大浜万葉の唯一人の弟子」、或いは、「遺弟」と自称している。そんな縁もあって、阿川氏が残した大浜氏関連の資料は、坂本氏が館長を務める高岡万葉歴史館に寄贈されることになったのだが、その資料の一部を急遽同館の展示会に出品することが決まった、という。

「ちょうど高岡市万葉歴史館では 4 月 20 日から春の特別展示として『うるわしき万葉植物の世界』という展示を催すことになっていたので、その展示にこの『かたかご』の葉書を展示できることになります。いいタイミングでした」

そして、展覧会のチラシを送ってくれた。それによると、「四季折々に咲く植物に寄せた万葉びとの想い」として、そのねらいを、「万葉集には 160 種を超える植物が登場し、約 4,500 首の歌の内 3 分の 1 の歌に植物が詠み込まれていると言われます」。そうした植物を写真とともに「第一線で活躍中の万葉学者による解説と合わせてご堪能してください」としている。年間計画で決まっていた予定に、たまたま阿川氏の「堅香子の絵葉書」が出てきたものだから、急遽展示となったのでチラシでは一切触れられていないが、同展の隠れた目玉の展示になるものと思われる。会期は、6 月 27 日（日）までである。

以前も書いたが、この堅香子の花の歌は、万葉故地高岡市の伏木小学校の第 2 校歌として歌われている。そして、その歌が市民の間に広がり、現在は市民が集まると皆で斉唱する市民歌となった。

また、平成 7 年には、この歌に詠まれたカタクリの花は、高岡市の花に指定され、切手の図柄に採用されたこともあったという。



高岡市にある堅香子の寺井史跡

ちなみに、坂本館長は、展覧会が始まると間もなく、館長が代表を務める短歌会のメンバーとともに、東北は仙北市のカタクリの群生地の見学に行くという。病後にもかかわらず、「見ることのタマフリを大いにやろう」、というのであるが、今回は、その吟行会で詠まれた堅香子の歌を紹介させてもらうこととしよう。

館長から「堅香子の絵葉書が出てきた」というメールをもらったちょうどその日とその翌日の 2 日にわたって、新聞のコラム欄に堅香子の句が載った。毎日新聞の俳人坪内稔典氏のコラム「季語刻々今昔」である。3 月 31 日の句は、<かたかごの花は飛びそう 走りそう>。<「かたかごの花」はカタクリの花の古名。この花、春風にそよぐさまは確かに走っている感じ>と解説されている。そして翌 4 月 1 日に取り上げた句は、<カタクリは 耳のうしろを 見せる花>。そして、<カタクリの花が風にそよいでいるさまを、「耳のうしろを見せている」と表現した。もちろん、少女か娘の耳だ>。解説の通り、何気なく少女のイメージとカタクリを重ね合わせ、若きエロチスムを感じさせる句だ。1300 年近い昔に、大伴家持が初めて詠んだ堅香子の花を、現代の人々が「かたかご」の古名で俳句に詠み、通底するイメージで歌と句を詠み合っている。まさに、日本文化の古と今、コラムのタイトル「今昔」は、わが国特有の短歌と俳句という短詩形文学が時代を超えてつながっていたのである。このことについては、「万葉集ナウ」の最後で触れることにする。

それにつけても、「日めくり万葉集」の番組で、この阿川氏にインタビューした聞き手のお粗末さが気になる。もし、阿川淳之氏が、阿川氏の資料を整理することがなかったら、そして、高岡万葉歴史館の坂本館長が、その多くの資料の中にこの絵葉書があることに気がつかなかったら、この貴重な資料はそのまま埋もれたままになっていたはずである。それを阿川氏のインタビューから 10 年以上も後に紹介できたのは幸運以外の何ものでもなかった。

当然、番組の収録時、つまり、阿川氏にマイクを向けている時、或いは、インタビューを終えた後でもいい、インタビュアーはこの興味深い絵葉書について、「その絵葉書、もしかしたらまだ残っていませんか？」と一言聞くべきだっただろう。80 年前もの絵葉書とはいえ、阿川氏にとってそんな大事なものなら、聞き手に、「もしや」と、いう想像力が欠けていたという他ない。「日めくり万葉集」というテレビ番組で紹介するには最高の物証となるはずだったのに……しかし、誰も責めるわけにはいかない。聞き手は、他ならぬ私だったのだから。

旧広島高校時代から大事にしている  
萬葉集を手に語る阿川弘之氏

